ー探求・川にちなんだ万葉集の歌ー

# 万葉の川心 第19回

川崎市立木月小学校教諭　船田　園子

## 東歌

### 麻久良我の許我の渡の韓楫の音高しもな寝なへ兒ゆゑに

（巻第十四　三五五五番歌）

春のうららの川を見下ろし、橋の上をバイクで走っていく。朝の陽射しは真っ直ぐで、でも、やさしくて、みつめる目も自然と細くなる。

「春の大河」――いつもの川なのに、そんな題をつけたくなる。青い流れ、お日様の匂い、白い細波、透明な音、野の花、緑に萌える草、光を集めた水面の輝き。「一級河川だ。」――一級河川の基準も知らないくせに、自分の中ではそうだと決め付ける。もちろん、自分にとってのいい川という意味で。バイクでも、車でも、自転車でも、気分よく走っている日の景色は、すべて自分のものである。「春の川は、きっと、触れずに遠くから眺めるのがいいんだな。」うららかで、でも、どこか艶めかしい。・・・ふと、出掛けに挨拶した「お隣のきれいな奥さん」を思い出した。触れずに遠くから眺めるのがいいのは、春の川だけではなさそうだ。

巻十四の東歌の中に、川を渡る船と恋をからめて詠んだところがある。その並べ方が実に楽しい。冒頭の歌の麻久良我は、地名と思われるが、どこかは未詳である。許我の渡は、茨城県の古河市という説がある。利根川に面しており、渡良瀬遊水池も近い。そして、以下のように並ぶ。

三五五五番歌「古河の渡りの船を漕ぐ韓楫の音が高いように、ずいぶん高く噂が立ったなあ。あの子と共寝したわけでもないのに」

いって、共寝をすれば人の噂があれこれと立つ。お前をどうしよう。」

三五五七番歌「悩ましい人妻だなあ。漕ぐ船が行ってしまうように忘れることはできなくて、いよいよ思いはつのっていく。」

三五五八番歌「あなたに逢わずに行ってしまえばきっと心残りだろう。麻久良我の古河を漕ぐ渡り船であなたとお逢いできないものか。」

三五五六番歌　潮船の置かれば悲しさ寝つれば人言しげし汝を何かも為

三五五七番歌　悩ましけ人妻かもよ漕ぐ船の忘れは為ないや思ひ増す

三五五八番歌　逢わずして行かば惜しけむ麻久良我の許我漕ぐ船に君も逢はむかも

まるで映画のように、次々とその情景が目の前に浮かんでくる。すべて場面は、渡りの船のある川。船が水音を立てて進む力強さがあり、また、遠のいていく淋しさがあり、岸にあげられたままの空しさがあり、それが恋心を盛り上げて、つのらせて、最後で恋人に逢うのである。

万葉集の楽しさの一つは、この配列にある。あまたの歌、万の言の葉より選び出された歌が、注意深く興味深く並べられている。詠まれた時代の異なる歌や、詠み手の異なる歌を並べて、しかし、それが一つの流れの中で、互いに響き合い深め合っている。古河の渡りと、船と、人妻と、忘れられない想い。川は、万葉集は、次はどんな恋の場面を見せてくれるのだろう。

写真の歌碑は、東武線新古河駅の北東三百メートルほどのところの鷲神社の境内にある。実際の「古河の渡り」はこの神社よりもう少し上流にあるそうだ。